

全国水辺のごみ調査

過去最多の1万3203人参加

調査は、全国川で
行われた（全国川
淀川の様子）ペットボトル増加、レジ袋減少
河川管理者や学生も参加、裾野広がる

全国川ごみネットワーク（東京都江戸川区）は二〇二四年「全国水辺のごみ調査」の結果をまとめ、過去最多となる延べ一万三千三百三人が参加したと報告した。参加人数は二〇二〇年のコロナ禍で大きく減少したが、二三年からは国土交通省の河川管理者が、二三年からは同志社大学・原田積夫准教授の授業受講生が加わるなどして四年連続で増加した。今回の調査ではレジ袋、カップ型飲料容器が前年に比べて減少したが、飲料ペットボトルだけは二年以降、増加の一途となった。

この調査は二〇一六年から始まり今回で九年目。水辺に散乱するごみの状況をまずは知ってもらい、散乱防止対策や環境保全活動へとつなげる狙いがある。今回の調査には前年の七四〇一人を大きく上回る延べ一

万三千三百三人が参加。三九都道府県から八二〇件の報告が寄せられた。河川管理者が大勢の市民と共に実施した調査報告が増えたことが参加人数を押し上げた。調査・回収された飲料ペットボトルは三万八千三百本（前年比二七・四本増）、レジ袋は五・六六枚（三・六八七枚減）、カップ型飲料容器は二・七五個（二・〇六三個減）となった。

この結果について、事務局の伊藤浩子さんは「ペットボトルは川でも目立つごみとなって、熱心に回収される方がペットボトルの多い場所での活動を積極的に実施されているため、多く回収されたと考えられる」と分析。「河口付近の水際では、過去に捨てられたペットボトルが大雨などで下流側に漂着し、拾われることも多い。しかし、川沿いの遊歩道などで定期的に回収していても、相変わらず散乱している状況も多く、ポイ捨ては依然として無くならないと感じる」とコメントした。

また、レジ袋の減少については「二二年、二三年はペットボトルとカップ型飲料容器の回収量が増加したが、レジ袋だけは減少が続いた。二〇二〇年七月からのレジ袋有料化による効果とみられる」と説明した。調査結果からの推計では、国内の河川には一八〇

〇万三千三百本のペットボトルが散乱していると見込む。参加者からは「人が多く集まる場所にも関わらず、ごみ箱が少ないのが問題。ごみ箱の設置を」と、なかへペットボトルが多すぎる。上流からの啓発が重要」などのコメントが寄せられた。一方、「近年はごみの投棄が目立って少なく、草刈りや清掃活動が効果を上げている」、「ごみ袋は有料化になってから投棄が少なくなっている」とのコメントも見られた。

全国川ごみネットワークは今回から、調査結果の詳細なデータを盛り込んだ報告書を新たに作成し、ホームページで公開している。また、二五年の調査が四月からスタートしており、参加者を募集している。